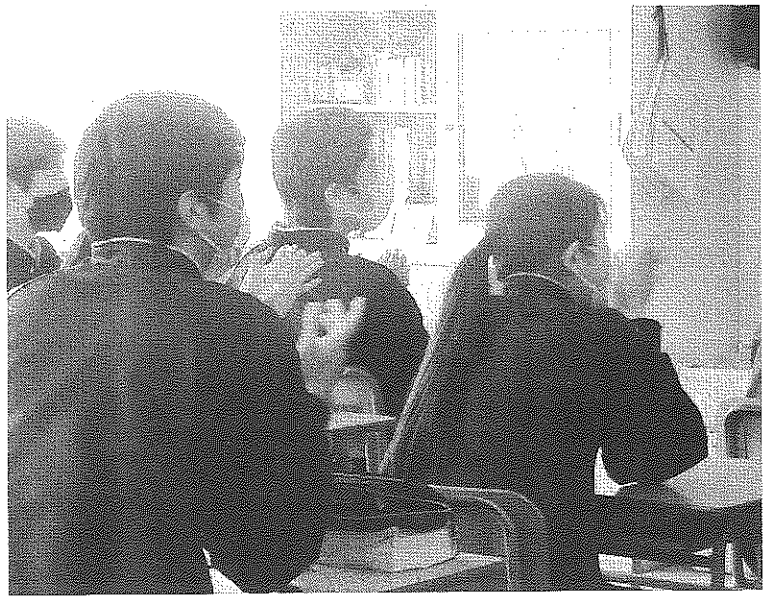


「決勝でメダル取って」

スノボ女子 母校で後輩ら声援

北京冬季五輪のスノボ女子ハーフパイプ予選が行われた9日、吉川市出身の小野光希選手(17)の母校の市立中央中学校(横川明久校長、生徒数727人)では、3年生約200人が各教室で大型テレビを前に応援した。生徒たちは大舞台で見事な滑りを見せた小野選手に声援を送り、「決勝で勝ってメダルを取ってほしい」と期待を寄せた。――面参照 (館池美央子)



画面越しに小野光希選手を応援する生徒ら＝吉川市立中央中学校

北京冬季五輪 2022

3時間目の授業を急ぎよ進路学習の一環に切り替えた。新型コロナウイルス対策とし

て密になるのを避け、各教室からライブ映像で競技の様子を見守った。
1本目を3位につけた小野選手が2本目に登場すると、生徒たちは決勝進出に期待を込め「頑張れ」と声援。次々

と繰り出す高度な技と高いジャンプに拍手で応援した。2位で予選を通過し、決勝進出を決めるとひととき大きな拍手が湧き起こり、明日の決勝でのメダル獲得を期待する声が上がった。
県選抜ハンドボールチームの選手でもある阿部竜士さん(16)は「画面越しに緊張感と迫力が伝わってきた。大舞台でのメンタルの強さは見習いたい。決勝では優勝し、メダルを取ってほしい」と期待。同校出身で小野選手と同級生の海保菜月さん(18)は「幼少期からオリンピックでの活躍を目指していた。小さい頃から

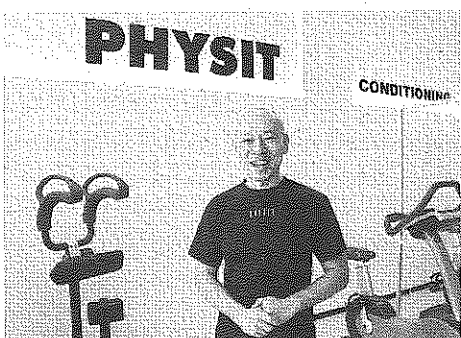
らの夢を応援しているので堂々と頑張ってほしい」と話した。
横川校長は「地道に努力してきた成果が大舞台で発揮できたのは素晴らしいこと。固唾を飲んで競技を見守っていた生徒たちにも良い影響を与えられたと思う」と誇りしげ。かつて小野選手を担任した上野信代教諭は「3年前に比べ、迫力や高さも格段にレベルアップしている。金を狙って競技に望んでいる熱い気持ちも伝わってきた。決勝では、いつも通り自分の力を出し切り、納得のいく滑りをしてほしい」とエールを送った。

銅から4年 再び五輪舞台

カーリング女子を支えた大森さん

カーリング女子の日本代表口コ・ソラーレが五輪の舞台に戻ってきた。当初は空き時間でのボランティ

獲得した平昌から4年。「勢いではなく、実力で世界と戦えるレベルに成長した」。初戦は10日。大躍進を支えた元トレーナーの大森達也さん(48)は、前回以上の活躍を信じている。
大森さんがロコ・ソラーレと関わりを持ったのは2012年ごろ。理学療法士として勤務していた北海道北見市の病院で、チーム創設者の本橋麻里さん(35)を担当したのがきっかけだ。「地元で頑張る子たちを花咲かせたい」との気持ちで始め、



カーリング女子の日本代表口コ・ソラーレを支えた元トレーナーの大森達也さん＝2021年11月、北海道北見市

「前回以上の活躍を」

当時のチームは「アスリートにはほど遠い状態」。数時間に及ぶ試合が終わると、疲労で動かない。「これでは勝てない。まずは基礎体力をつけなければ」と、体幹トレーニングや持久走など基本的なメニューから取り組んだ。
課題はそれだけではない。小柄なメンバーは食事の量が食べられない。普段はおやつや甘味を禁止し、海外遠征に同行して米と鍋が中心の食事を調理したことも。すると効果が表れ、試合終了後に疲労感を訴えることがなくなった。
ロコ・ソラーレは飛躍を遂げ、16年の世界選手権で2位、18年平昌五輪で銅メダルに輝いた。今